

創作少年少女小説

おに

か

鬼を飼うゴロ

北畠八穂



創作少年少女小説

鬼を飼うゴロ

北畠八穂



実業之日本社

NDC 913

著者の了解により検印省略

創作少年少女小説

^{おに}^か
鬼を飼うゴロ

^{きたばたけ} ^や ^ほ
北 畠 八 穂

実業之日本社

1971年

264ページ

21.5cm

本文9ポ活字使用

小学校上級～中学生向き

^{おに} ^か
鬼を飼うゴロ

1971年8月25日 初版発行

著 者 北 畠 八 穂

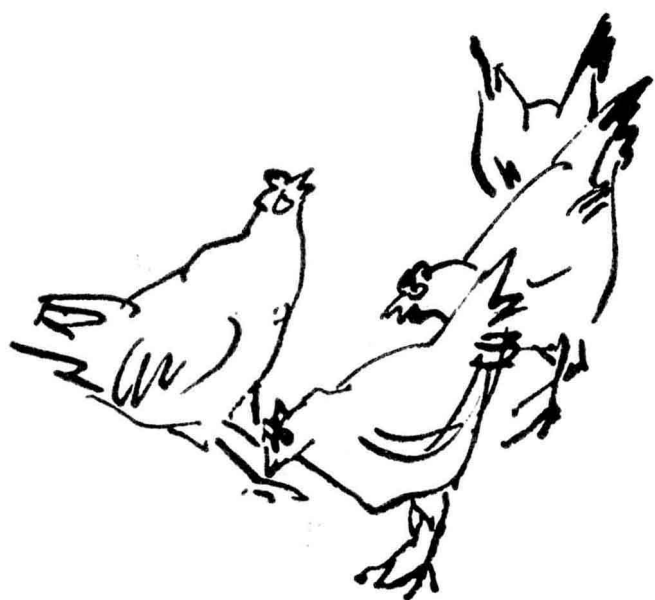
発行者 増 田 義 彦

印刷所 株式会社 佐藤印刷所

発行所 ^{株式}
^{会社} 実業之日本社

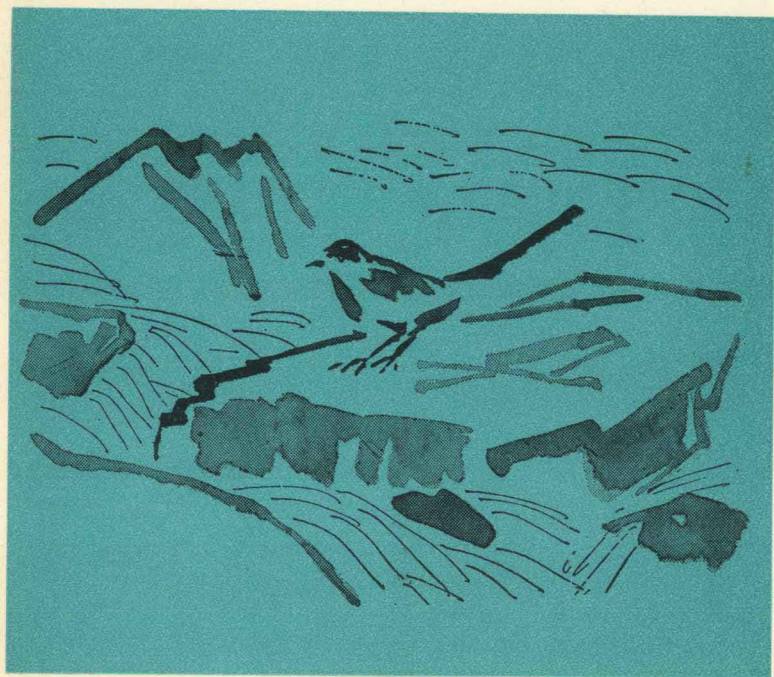
〔104〕 東京都中央区銀座1-3-9

TEL (562) 4311 (大代) 振替東京329



もくじ

第一章	メンコイ・ボンデ	5
第二章	出かせぎ出発	80
第三章	とつても遠く、 とつても近くなったお父ウ	145
第四章	かわるがわる、新しく	214
あとがき		260



■この本の絵をかいた人■

加藤 精一

一九〇五年、北海道旭川市に生まれる。東京美術学校卒業。藤島武二に師事。油絵を得意として銀座松屋画廊で一年おきに個展をひらいている。

第一章 メンコイ・ボンチ

1

白ネコを飼^かつてゐるのはミノ。茶っぼい犬を飼^かつてゐるのはシゲル。

おらは、鬼^{おに}を飼^かつてゐる。こいつめんこい（かわいい）。見せたいな。が、おらにしか見えないんだ。ネコでも、犬でも、ものをくう。おらの家は、くわせるものがたりない。せわをする手もたりない。飼^かつてゐるものが、家のだれかにじゃれついたら、ポイだ。すてられちまう。

ウロチョロ見えたって、じゃまなんだ。

おらのかわいい鬼^{おに}は、たいてい、おらの耳のおくに両足だいてうすくまる。パツと手を羽^{はね}にし、クツと足をバネにしてとびだすが――。

ミノのネコの名はチイ。シゲルの犬はボン。二つあわせたくらいかわいいおらの鬼^{おに}は、ボンチだ。

おらは、三浦^{みうら}吾郎^{ごろう}。ゴロっていえば、わかる。ボンチの苗^{みょうじ}字^じは、メンコイだ。

メンコイ・ボンチ。



いつから飼^かつてゐるかつて。いつからだろうな。飼^かつてゐるおらも、わからない。

ポット、耳のおくに、ケシの種^{たね}みたいなのが、くつついたのかな。それがボンチのたまごだったのかな。たまごから、生まれたてのボンチは、ボンヤリくもり色の、かげぼうしみたいだったのが、だんだんハッキリしたボンチになったらしい。

どんな毛なみかつて？ 毛はない。ハダカだ。色はって？ 色って、きめられないんだ。

赤くもなる。黒くもなる。青くも、むらさきにもなるんだ。黄色にもなる。

うすべにや、クリーム色など、やさしげな色をしていたからって、ゆだんがならない。

やさしげなうす色で、骨^{ほね}のずいまでさしとおす。するどいツノを、ズキッとつきさしてきたりする。

最高^{じょうじょう}に上々^{じょうじょう}きげんときは、まったくすきとおっている。じゃ、見えないだろうって？ とんでもない。すきとおってたって、おらにはカッキリ見える。

ボンチは、生きているんだ。イキがいいんだ。すきとおったって、ピチピチしている。すきとおったときほど、はげしい電波をだしている。

じゃ、かたちは、どうだったのか？ それも、きまってないんだ。

からだじゅうを、イボだらけにもする。ハリネズミみたいにもなる。かと思えば、クズ湯^{くずゆ}みたいにも、かたがたなくトロリともなる。

ただ、アザかと思えるほどにちぢまったり、とてつもなくのびたりするツノをもった頭と、胴^{どう}と、手足はある。しっぽも、ある。たいくつなときは、しっぽをひきずりだして、ナワトビをしているから。

けど、ふだんは、しっぽは見えない。いらなときは、ひとりでスルスルスルと胴^{どう}体のなかに、くりこん

でしまう。そういうしかけのしつぽではないかと思う。

そんなぐあいのはかきは、ポンチのからだじゅうにあるらしい。よこっぱらからも、背中からも、突然、ニョキッと手がでてくる。トゲもだす。腹がバクリと大口にわれて、キバをむく。

ススッと足の下に、足をくりだす式にのびして、どこまでだつてせいたかノッポになる。ふとさだつて、みるみる二倍、四倍と、倍の倍にふとらして、ふとっちょになつてしまふ。

こんな、思いがけないことが、キリなくできるポンチだ。そいつが、おらの耳のおくに、チョコッと、ケシつぶくらしいになつてはいっているんだ。だから、おらは、いっそうかわいくつてならないじゃないか。ま、ポンチのポンチぶりを、放送しよう。

えっさ、えっさ、えっさ、ほい、ほい、と、おらが、石けりの足つきで、山道をいく。すると、ポンチは、えいこうら、えいこうら、も一つ、えいこうらと、調子をとる。

(どっかで、きいたことがある調子だな。)

と、おれが、頭をかしげる。ポンチが、こたえるんだ。

『ボルガの船唄さ、ゴロ兄^{あに}キ。』

(そうか、学校のレコードできいたんだ。ボルガの船唄^{ふなうた}だと、先生がいったんだ。ポンチのやつ、おほえてたんだな。)

おらは、うなずく。

そこで、ポンチは、おらにしゃべる。ポンチのしゃべるのは、電報の信号とおなじだ。ポチ、ポチ、ポチと、

うつんだ。うたれるオラは、すぐわかる。

『な、ゴロ兄^{あに}キ。ゼイタクなんだぞ、山に住む子^こってのは。』

おらは、とんでもないと、くびをふる。口ばしをとんがらしてボヤいてみせる。

(村まではバスがくる。バスにのつていけば町へつく。町には、見るだけでもボウツとなる、ほしい品物が、どつきりある店がならんでいる。大きいコーヒー茶^{ちや}わんにのつて、まわったり、木馬や、竜^{りゅう}にのつてまわる遊び場もある。そうそう、高く高くのぼる飛行船^{ひこうせん}だってあったじゃないか。)

すると、ポンチは、ベツとツバをはく。

『ゴロ兄^{あに}キ、あんなんが、うれしいか。』

おうよと、おらが返事をするには、さもさも、ガッカリしたポンチの声だ。おらは、(わるいかよ、あれもおもしろくないヤツァ、かたわだ。へソまがりだ。)

ポンチは、鼻で、フンとこばかにして、

『フン、ま、そんなもんか。ポンチはまた、ゴロ兄^{あに}キをもすこし、まし[、]と思つてた。』

さもつまらなそうに、つめをかむ。つめをかむとポンチは、だまりこくるんだ。

おらは、はりあいがなくなる。で、ポンチをしゃべらそうと、つつく。

(ヤイ、ポンチ、おらがどうしましたと思つてたんだい。)

ダメだよつてとこを、ポンチはくびをふる。ふるたびに、ポンチは小さくなる。ふつてふつて、ポンチのからだは、なくなるんじゃないか。おらは、ハラハラする。

(よう、ポンチ、てんでベケなおらだつてのか。ほんなら、おら、ベケベケのベケになる。ポンチ、かつてにし



ろい。)

頭をヒザのあいだにつつこんでたポンチは、片目のよこ目で、おらをチラッと見る。

おらは、ズボンからナイフをぬいて、道わきの木に、グサッとつき立てる。

(ベケ、ベケのベケッ。)

きみょうなトリが鳴くように、さけぶ。ちょっとして、コダマがかえってくる。

(ベカ、ベカのベカッ。)

おれは、こんなワルサも、きらいじゃない。ポンチは、ますますくびをふる。

図にのつて、も一度、もつとひどくやらかそうと、ナイフを持ちあげたおらに、

『なさけねえな、ゴロ兄^{あに}キ。』

ポンチは、ま^った^った^っをかける。ガッキと、ナイフを持ったおらの手を、おさえてる。

エヘヘと、おらはわらう。

ウ、フフと、ポンチもわらう。

『ふざけんな。』

と、ポンチは、ふとくしたうでをふりまわして、おらにぶつつけながら、そのうでをちぢめる。

そうとういたい。ぶつつけるごとに、ポンチのうではほそくなる。だから、いたさもだんだん小さくなる。し

まいの、うち、二うちは、まるでなでてるみたいだ。

おらは、持ったナイフをふりまわす。

(まだ、ポンチが、おらをこ^ばかにするようなら、おらは、もちっとひどいことやらかす。)

って、とこだ。ボンチは、ひたいに、たてじわをグッとよせて、にがわらいする。

『ゴロ兄キ、兄キも、四半分ばかりは、“バカッ気”があるってのが、わかったよ。』

(えらがるな。なら、どうだってんだ。)

おらは、たったいま、その四分の一の“バカッ気”を、二分の一にもふやせるんだと、かたをはる。

——まるっきりの、バカモン。——

ってツラつきで、ボンチは、つきあいぶりを、ガラリとかえる。ここが見ものだ。おらは、こうなるのがたのしみで、アクタレるんだ。ボンチはまいったって声で、

『のこりの四分の三が、おいしいじゃないか、兄キ。ムダにするのは、いつだってたやすい。』

(ボンチも、あんまり頭のいいほうでないな。)

おらは、やじる。ボンチは、ツノをしなびさせて、

『つらいな。生まれつき、ボンチはりこうじゃないんだ。』

ツノをまるめる手つきで、頭をいじり、

『ボンチだって、かしこくはなりたいたいよ。なれないんだな、兄キ。』

おらは、アクタレすぎが、もうしわけなくなる。ボンチ鬼のこんなさまは、見たくない。

(みっともないぜ、ボンチ。しよげるない。鬼のボンチ、にあわないよ。びっくりアイデアでこい。)

おらは、ショックをくらわす。注射だ。ボンチは、しおれたツノを立てる。ダラリとしたキバをはる。口もカッとでっかくあき、

『ミスだ。鬼のひものは、価がさがるね。』

(さがるところか、くさったキノコさ。)

くさいと、おらは鼻をつまんでみせる。ポンチは、はずかしそうにした。はずかしさを、まぎらしたいとみえて、ぎやくにでてきた。

『ゴロ兄^{あに}キだって、山のゼイタク、知らないなんてハジだぜ。』

どなつといて、ついでにぼやいた。

『町のあそび場、うらやましがったりして。』

すっかり、はずみをつけたポンチめ。

『つまりは、ゴロ兄キも、いまのさつきは、頭の調子がよくなかったってわけだ。』

わるくちを、えんりょなくしゃべるのは、気持ちよさそうだ。

(ポンチにかぶれたんだ、おら。)

おらも、やつつけた。ンなわるくちは、かまいつけないさって調子で、ポンチはきばって、

『びっくらアイデアでないかよ。山のゼイタクさがしは、よ。』

おらだって、まけていない。

(ゼイタクだって。しょうこを、見せてみる。)

2

あきれたと、ひっくりかえってみせたポンチは、ペタリとこしをおとして、うしろ手をつき、

『しょうこを、見せなきゃ、わかんないかな。』

みこみちがいったと、イヤイヤをし、

『ポンチは自分で頭がわるいを知ってるんだけど、ゴロ兄キは、そっちのほうでも兄キだな。バカのほうでもよ。頭がわるいを知らないんだもん。』

コンチクショッと、おらは、道ばたの石ころをつかんだ。つかんでみて、

(こりゃ、ダメだ。)

と、自分の頭のわるさを思い知った。石ころを、自分の耳のおくにいる鬼おにのポンチに、どうして、ぶつつけられるものか。

しくじったと、手の石をボトッとおとすのもシャクだ。で、おらは、つかんだ石ころを、右っかわの谷にひろがる樹海じゅかいの中でも、めだつ木立ちにぶつけた。

(おまえのこずえが、ツンぬけて高いのは、とくべつガツガツ、地から養分すったんか、よくばりめッ。)

ぶつつけた石は、ねらいたがわずあたた。

カツン、コーンと、ひびいた。

『な。』

鬼おにのポンチは、そらみろって顔つきで、

『すてきな音だ。』

(なをぬかしやがる。おらは、三分の二ばかり、アクタレになってるんだぜ。)

と、にらみつけた。ポンチは、にらまれるなんてなれっこだ、と、平気で、

『山でなきゃない、みどりの風をきって、とびはしった石が、じょうぶな木のみきにあたって、あんないい音をたてる。ゼイタクな音楽じゃありませんか。』

と、おらの耳のうちがわを、ピアノみたいに指でうち、ギターみたいに、指でひいた。ふえみたいにもふく。耳アカをそうじしてるのかもしれない。

と、きこえてきた。谷の樹海じゅかいをとおこした下を流れる川の音。こずえからこずえにわたって鳴く鳥のさえずり。

『ね、ゴロ兄あにキ、ききなれてるからって、耳をなまけさせちゃ、もったいない、な。』

うでを、ブンとタクトみたいにあつて、

『これだけのシンホニーをきくには、東京でなら、大音楽会へいかなきゃ、きけないんですぜ。高い入場券けんを買つて。』

葉のそよぎ、虫のすだき、遠くで風がむきをかえる音。おらの耳は、澄すんできた。草のつる、木のこずえがのびる音まで、ききとろうとする。

「ヤーイ。」

と、きこえた。とくべつよくきこえた。草のつるがのびる音も、きこうとかまえた耳にだ。なのに、トタンに、
(ヤだな。)

と、思った。あんのじょう、つぎに、

「うすバカンチの、ゴンボウヤアイ。」

と、きた。とっさにおらは、石ころをひろって、ぐるっと、声のでどこをさがした。みつけた石つぶてをぶつ